

『文場秀句』補説

——『敦煌秘笈』羽 072 と『和漢朗詠集私注』*

永田知之

一、はじめに

唐代に編まれた初學者向けの啓蒙書『文場秀句』に関する一文¹を筆者が著して以来、七年の歳月を経た。この間、財團法人武田科學振興財團杏雨書屋に所藏される中國中世寫本が公表（2009 年に開始）されたことは、周知のとおりである。それらの中に『文場秀句』が書寫された文獻が見出された事實は、日本中世の諸資料にのみ逸文が見られると思われていた同書の研究において、大きな出来事といえよう。この新出資料に加え、筆者が着目した『文場秀句』に関わる可能性を持つ記述を紹介し、前稿を補うことが小論の目的となる。

二、羽 072 ノ b ノ二に見える『文場秀句』

まず公刊された圖録²に據って、『文場秀句』の一部を含む杏雨書屋所藏の敦煌寫本羽 072 ノ b ノ二に関する基本的な情報を記しておく。當該の寫本は首尾共に缺けており（二紙の斷片）、縦 27.5、横 44.6cm、一行二十八乃至二十九字、併せて三十五行を存する。羽 072 ノーという番號を附された寫本とは同筆で、共に道教の儀禮にまつわる文例集であると分かる。先行研究³に従って、その中に唐突に書寫された『文場秀句』を次に挙げておく。

*小論は日本學術振興會科學研究費補助金「中國典籍日本古寫本の研究」（基盤研究 A、研究代表者：高田時雄京都大學名譽教授）による研究成果の一部である。

¹永田知之（2008）以下の本文では「前稿」と稱する。

²財團法人武田科學振興財團杏雨書屋（2009）424-426 頁參照。

³周西波（2012）、王三慶（2014）455-484 頁。本文で引證する周・王兩氏の説は全てこれらに據る。

羽072ノbノ二（擬）道教齋儀ノ二

- 07 〔上略〕文場秀句 乾象^{天文也}、圓清^{天形、圓之清者上為天地}、方
- 08 濁^{地形方、燕之重濁者下為地也}、圓蓋^{天圓在上如蓋也}、方輿^{地方、如在下輿}、玄蓋^{天色玄也}、黃輿^{地色黃也}、高天、厚
- 09 地、九天^{天有九野、陽數九也}、圓清上廓、日月以為綱、方濁下凝、列山何而作鎮。圓蓋上
- 10 浮、耀七星於乾紀、方輿下關、列五鎮於坤維。日月第二 金烏^{日色赤、故云金。中有}
- 11 三足^{鳥也}、玉兔^{月色白、故云玉。又月中有兔也}、陽烏^{日為陽清}、陰精^{月為陰精}、朝羲^{羲和為日御也}、夜魄^{十五日巳之月、清而魄玉}、義
- 12 光^{日也}、娥影^{恆娥有月御也}、扶光^{日月出於扶桑上也}、桂影^{月中有桂樹也}、烏景蟾輝^{月中蟾蜍、蝦蟇}、朝輝^{日也}、夜
- 13 景^{月也}、輝靈^{日也}、望舒^{月也}、日烏、月兔、杲杲^{日光}、杳杳^{日將欲夕沒也}、輝輝^{月正中也}、金
- 烏旦上、散朱
- 14 景於遙空、玉兔霄懸、騰素華於向漢。蟾輝東上、烏景西傾。〔以下略〕

これを前稿でも引用した平安時代の説話集『注好選』に引く逸文と比べて見られたい⁴。

- a) 文場秀句云、天云圓清。天刑圓、氣之輕清者、上為天。又天云玄蓋。即天色玄故也。(『注好選』中「天名曰太極第一」)
- b) 文場秀句云、地云方濁。地之方濁、地之方、氣重濁者、下為地。又地云方輿。地方在下為輿。(同中「地稱為清濁第二」)
- c) 文場秀句云、日色赤故云金。日中有三足鳥、故云烏。亦日云陽烏。日為陽精。亦日扶光。日出於扶桑山。(同下「日名金烏第一」)
- d) 文場秀句云、月色白故云玉。月中有兔、故云兔。亦月云陰兔。亦月云娥影。恒娥為月御。亦月云桂影。月中有桂。亦云景夜。亦望舒。(同下「月稱玉兔第二」)⁵

周西波・王三慶兩氏が指摘されたとおり、羽072ノbノ二の第七行から第十四行とここに挙げた逸文が同じ『文場秀句』を出處とすることは疑い得ない。王氏は更に前者と他の敦煌文獻に見える類書（表題を缺く）の一節との類似を指摘される。その一部を次に引いておく。

P.3956 + P.2678 （擬）稗金

- 01 天地第一 乾象^{天文也}、坤元^{地理}、圓清^{天形}、方濁^{地形}、圓蓋^{天圓在上如蓋也}、方輿^{地方}〔
- 02 玄天色玄、黃輿^{地色黃也}、高天、厚地、九天^{天有九重之霄、地有九野、有陽數九}、十地^{地有十洲、又陰數十}、
- 03 穹隆天形穹 隆然也。礧礧地形礧礧、言廣大也。圓清上朗、懸日月以

⁴ 『文場秀句』の逸文は李銘敬（2003）や永田知之（2008）113-114 頁参照。

⁵ 以上、東寺貴重資料刊行會（1983）42、44、83、84 頁に據る。『注好選』は撰者未詳。仁平二年（1152）書寫の東寺觀智院藏本などがある。

爲綱、方濁

- 04 下凝、列山河而作鎮。圖蓋上、耀七星於乾紀、方輿下
05 關、列五鎮於乾維。 日月第二 金烏 日色赤、故云金烏。
日中有三足鳥、玉兔
06 月色白、故云玉兔。
月中有兔如玉、陽烏 月有
陽精、陰兔 月有
陰精、朝曦 和焉
日御、夜魄 十五日已後、明
霽而魄生、
07 曦光 日也、娥影 月也、扶光 日出於
扶桑也、桂影 月中有
桂樹、烏影蟾暉 日中有鳥、
月中
08 蟾蜍、蝦、朝耀 日也、夜景 月也、耀氣 日也、望舒 月也、日烏、月兔、杲杲 日光、
09 皎皎 月光、杳杳 日將
夕、輝輝 月正
圓也、金烏旦上、散朱景於遙空、玉兔霄
10 臨、騰素花於略漢。□□東上、烏景西傾。 風雲三〔以下略〕

これに續けて「風雲」、「雷電」、「煙霧」、「春」、「夏」、「秋」、「冬」、「帝德」、「瑞應」、「王」と題された項目が見える。いずれも各項の主題に関わる語彙が列挙され、その多くに語源・語義が雙行で注記される⁶。彼此参照すれば、誤脱を正せる箇所も多いほどに似通う点から考えて、この「(擬)稗金」と先に挙げた『文場秀句』が何らかの関係を持つ可能性は高い。『注好撰』での引用と併せて、前掲の新出資料は同書にまつわる逸話を改めて想起させる。

即ち、五代の宰相である馮道(882~954)が「『兔園策』(のような初學者向けの啓蒙書)を攜えている」という嘲弄に對して、「朝野の士人は『文場秀句』を読んだだけで、科擧を受験するではないか」と遣り返した話柄(『舊五代史』卷百二十六「馮道傳」)がそれである⁷。前稿との重複を厭わずに述べると、彼がこう言う以上、『文場秀句』は相當に低級と見做される一方で、文章を著す參考に供されたと想像される。先の引用を思い起こされたい。「圖清」などそこに擧がる代用語を使えば、天を「天」と直接に表現する、單調な修辭は避けられよう。項目で分類し語彙を掲出する羽072は、用語集としての性格がより明瞭といえる。

道教の齋文に關する手引きとして羽072ノbが持つ特徴は、周氏の論文(注3)に詳しい。一つ付け加えれば、その中にこのような用語集が寫された點は、兩者に共通する範例としての性格によるのかもしれない。宋以降に亡びた『文場秀句』が確かに中國、それも敦煌で用いられた事實を示す新出資料をも蹈まえながら、次節以降では更に分析を進めたい。

三、『文場秀句』の撰者と書目における分類

現物こそ未發見だったが、『文場秀句』については逸文の他、撰者名等の記録が幾つか知られていた。例えば敦煌文獻P.2721「雜抄」という寫本(書寫年代未詳)

⁶P.3956 + P.2678 については王三慶(1993)108-109、355-444 頁參照。

⁷類話としては、『冊府元龜』卷九百三十九「總錄部・讖諛」に引くものが、特に近い。

が列挙する學んでおくべき典籍の中に「文場秀 孟憲子作」とある（「秀」の後の「句」を脱したと思しい）。また南宋の紹興年間（1131～1162）に編まれた『秘書省續編到四庫闕書目』卷二「子類・類書」には「孟獻子撰文場秀句一卷（闕）」とある。更には、次のような斷片も傳わる。

孟獻忠文場秀句曰、絳樹者、古美妾也。（『遊仙窟』卷一「絳樹青琴、對之羞死」注）

「孟獻忠（子）」と「孟憲子」はあるいは同一人物だろうか。孟獻忠の名は日本傳存の舊鈔本二種に見えるが⁸、七世紀後半と八世紀初頭の「孟獻忠」が『文場秀句』の撰者と同名異人である可能性も排除できない。とにかく、孟某の經歷を示す特段の資料は存しない。さて、これらとは別に、『文場秀句』を王起の著作とする記録が見られる。王起（760～847）は中・晩唐期の高官で、宰相にまで至った。彼と同書との関係を示す記録は、次のとおりである。

I) 開成元年二月癸未、……時又詔兵部尚書王起進文場秀句一卷。（『冊府元龜』卷四十「帝王部・好文」）

II) 王起文場秀句一卷（『新唐書』卷六十「藝文志四・丁部集錄・總集類」）

III) 爲太子廣五運圖及文場秀句等獻之。（『舊唐書』卷百六十四「王起傳」）

I) に據れば、開成元年（836）皇帝・文宗（在位 826～840）に『文場秀句』は進上された。その事実と II) が同書を「總集」に分類する點から、それは選集、しかも秀句を集めたアンソロジーで⁹、更には孟獻忠（獻子、憲子）撰の啓蒙書とは同名異書という説がある¹⁰。その一方で、孟某と王起の書の間に関係を見出す議論もあり¹¹、筆者もそれを支持する。

即ち III) の「廣」を増補の意に取れば、王起以前に『文場秀句』と題する文獻が存したと考えられ、それは孟某の作とも見做し得るからである。だが、王起の名を冠する『文場秀句』なり、逸文なりが発見されぬ以上、同書の文獻學的な性格は解明し難い。ただ、ここに從來、注目されなかった日本に傳わる関連資料が存在する。次節で、その内容を紹介したい。

⁸ 開元六年（718）成書の『金剛般若經集驗記』に作者として、また七世紀末から八世紀初頭に書寫された『王勃集』に収める上元三年（676）頃に書かれた手紙の作者として孟獻忠の名が見える。なお寛平九年（897）以前に成った『日本國見在書目錄』の「十 小學家」も「文場秀句一卷」を著録するから日本への傳來はそれ以前だが、そこに撰者名は見えない。

⁹ 陳尚君（1997）202 頁がその立場を取る。

¹⁰ 那波利貞（1974）260 頁、李銘敬（2003）66-67 頁、張海鷗（2007）參照。

¹¹ 山崎誠（1993）319 頁、白化文（1999）56 頁參照。

四、『和漢朗詠集私注』に引く王起の説

藤原公任(966～1041)『和漢朗詠集』(十一世紀初めに成書)は漢詩文と和歌の引用より成る秀句集である。同書に關しては古來、多くの典籍を利用した注釋が幾つか著されてきた。釋信阿『和漢朗詠集私注』(1161年成立)も、その一つである。これ以降、『私注』と略稱する同書から五條の注を、注釋の對象である詩句に續ける形で以下に引用する¹²。

A) 第五絃聲尤掩抑、隴水凍咽流不得。(『和漢朗詠集』卷下「雜・管絃」)

王起云、炎帝神農氏始造五絃琴。(『私注』卷四)

B) 不獨記東都履道里有閑居泰適之叟、亦令知皇唐大和歲有理世安樂之音。(「雜・閑居」)

大和者、唐文宗年號也。王起云、唐者李氏、起自高祖神堯、終于文宗皇帝。其間十五代。廿一主、共二百九十年。梁滅之。(『私注』卷五)

C) 幸逢堯舜無爲化、得作犧皇向上人。(卷下「雜・帝王」)

王起云、帝堯陶唐氏、姓伊祁、名放勳。高辛氏娶陳鋒氏女而生帝。眉有八彩。都平陽、茅茨不剪。土階三尺、萸蒲生庖。命羲和掌四時、封大山置諫鼓。立誹謗木。景星見、甘露降、醴泉出。十六即位、年百歲崩。又曰、帝舜有虞氏、姓姚、名重華。瞽叟子。母握登、感大虹而生帝。目有重瞳。年二十、以孝聞。三十、堯妻以二女。受堯禪。萸莢生階、作簫韶。年一百五歲崩。又曰、大昊伏羲氏、風姓。麟身人首。母曰華胥。燧人之時、有大跡出雷澤。華胥履之、感而生帝。制嫁娶、畫八卦、分九疇、次甲曆、造書契、養犧牲、以充庖厨。都陳、在位一百一十年。(『私注』卷六¹³)

D) 布政之庭、風流未必敵於崑閬、兼之者此地矣。好文之世、德化未必光于黃炎、兼之者我君也。(卷下「雜・帝王」)

王起云、炎帝神農氏、姜姓。少昊之子。母女登、感神人而生帝。人身牛首、辨百藥、製本草、造五絃。在位一百四十年¹⁴。(『私注』卷六)

E) 東平蒼之雅量、寧非漢皇褒貴無雙之弟哉、桂陽鑠之文辭、亦是齊帝寵愛第

¹² 『私注』の寫本は複數傳わるが、例えば柳澤良一(2010)に石川縣立圖書館藏川口文庫の室町末期寫本の影印を收録する。小論の引用箇所はその132、174、185-186、187、189頁に見える。また、各寫本を對照した翻刻が伊藤正義等(1997)に收められる。同書487、535、549-550、551、553頁參照。

¹³ 以上の三件は各々白居易の詩歌、即ち「五絃彈」、「序洛詩」、「池上閑吟二首」其一(『白氏文集』卷三、卷六十一、卷六十四)の一節に對する注釋である。

¹⁴ 釋無名『和漢朗詠註抄』(『私注』の少し後に成書か)の鎌倉中期寫本(個人藏、重要文化財)は「王起云、炎帝神農氏、姜姓。少昊之子也。母女登、感神人而生帝。人身牛首、辨百藥、製本草、造五絃琴。在位一百卅年也」に作る。伊藤正義等(1997)836頁。

八之子也¹⁵。(卷下「親王」)

又曰、齊帝、王起云、此文宣帝、姓高、名得。凡五主合三十年、廢帝殷、孝昭帝演、武成帝湛、後主緯云々。(『私注』卷六)¹⁶

みな「王起云」として、彼の説を引く¹⁷。問題はそれが如何なる典籍の引用かという點に在る。王起の著書は全て失われたが、數件の書名は傳わる¹⁸。ただ分類や當時における一級の知識人だった彼の立場から見て、A) から E) の記述を含むに相應しい著作はごく少ない。『文場秀句』も候補となり得ようが、前掲の逸文を含めて、ややそぐわないように思われる。

文場云、八龍：荀氏有子八人、時號爲八龍。語曰、時人、荀氏八龍、慈明無雙也。(『言泉集』下「八龍」)

文場秀句云、羸呂者、武藝臣也。手取弓、空雁離連落地、林猿捨友藏空也。(『仲文章』「貴賤篇・羸呂現世、雁猿衝於其威」注)

澄憲『言泉集』は鎌倉時代の唱導書で、東大寺北林院舊藏の天文二十二年(1553)書寫本が傳わる。また『仲文章』は恐らく十一世紀の教訓書で、正安二年(1300)の寫本が現存する。今に傳わる『文場秀句』の逸文と思しき斷片には、このように故事・古人について記すものもある。だが長さ(引用者による節略はあるが)といい、王侯ならぬ歴史・傳説上の人物を語る點といい、相當な分量を持ち、帝王や王朝に關して述べる「王起云」とは毛色が異なる。

そこでより條件に適うと思われるのが、『五位圖』、『廣五運圖』と題された著述である。前節の III) で挙げた史料にも、後者の名は見えた。次節では、それらについて検討したい。

五、『五位圖』と『廣五運圖』

王起傳……起加皇太子侍讀(……)上使廣五位圖、俾太子知古今治亂¹⁹。……志編年類、五位圖十卷、廣五運圖卷亡、……崇文總目王氏五

¹⁵E) 本文の「桂陽鑠」は南齊の皇族蕭鑠であり、そこで『私注』が北齊の皇統を擧げるのは、注の意味を成さない。注 30 參照。

¹⁶以上の二件はそれぞれ菅原文時「暮春侍宴冷泉院池亭同賦花光浮水上詩序」、「聽第八皇子始讀御注孝經詩序」(『本朝文粹』卷十、卷九)の一節に關する注釈である。

¹⁷もっとも六地藏寺(1985)に收める天文十八年(1549)書寫の六地藏寺藏本『私注』は、「王起」を多く「王記」に作る。ただし C) だけは「王起」に作るから、他が誤りと思しい。同書 60、120-121、134-135、136-137、139 頁參照。

¹⁸福田俊昭(1991) 39 頁參照。同論文は王起と文宗や太子李永(後述)との關係にも觸れる。

¹⁹「王起傳」の引用は、現在の新舊兩唐書には見えない。「志」云々は『新唐書』卷五十八「藝文志四・乙部史錄・編年類」、『崇文總目』は原本卷十「編年類」の記事に據る。

位圖三卷（書目同）²⁰、自開闢至唐、以五運爲序。（『玉海』卷五十六「藝文・圖・唐五位圖」）

文宗の命で、王起が『五位圖』を増補したことや彼の『王氏五位圖』が五行の運行を背景に王朝が交代する様子を述べた史書だった旨が記される。先に挙げた A) から E) が全て帝王・王朝の事跡を述べていたことを思えば、それらが『王氏五位圖』等の逸文だった可能性は充分にある²¹。ここで思い返されるのが、前々節で引いた III) の王起が「太子の爲に」『五運圖』を「廣げ」、献上したという記述である。『玉海』が記す、『廣五運圖』や『王氏五位圖』はこの『五運圖』を増補した文獻に当たるのではないか。王起が増訂後の『五運圖』を獻じた太子とは、文宗の長男李永（?～838）のことである。彼の生年は不明だが、その没時に文宗（808～840）がまだ数え三十一歳だったので、少年の身で世を去ったと思われる。

これを前提に『私注』が引く王起の説を見返せば、なるほど初學者向けの内容ではある。伏羲・神農・堯・舜ら人口に膾炙した聖天子の傳説（A）・C）・D)) や唐と時代が比較的近い北齊の事跡（E)) など、當時の教養人にとっては事新しい知識ではあるまい。B) に見える唐皇室の姓と始祖に至っては、唐代の知識人で知らぬ者がいるはずも無い。

同じ撰者、類似した書名から、『廣五運圖』と『王氏五位圖』との間には、何らかの関係が想像される。その様相は、いま明らかにし難い。ただ、書目で同じ「編年類」に置かれた点から、『廣五運圖』の方も上古から唐代を対象とした編年體の通史だとは考えられないか。

第三節に引いた III) の『五運圖』と同じく『文場秀句』等を王起が増訂したとの記述を思い起こされたい。先の A) から E) に見える王起の説が『廣五運圖』の引用とすれば、その事實は同時に献上された王起版『文場秀句』の性格をも規定する。つまり、それは先行研究（注 9、10 所掲論著）が考える如き秀句集ではなく、やはり啓蒙の書だったのではないか。さもなければ人も知る故事を並べた『私注』所引「王起云」の内容とは不釣り合いに思える。

いかにも、如上の議論は推測に推測を重ねた結果でしかない。まず、『私注』に見える「王起」が中・晩唐期の著名人を指し、その説が一つの文獻に由來するという保證は無い。他の人物や記録に残らない著作を排除できても、まだ問題は残

²⁰ 『玉海』卷百二十九「官制・儲官・唐五位圖 詩笏」には「中興館閣書目云、王氏五位圖三卷、唐開成初、判太常卿事王起撰」とある。

²¹ 『私注』の引用 B) に「文宗皇帝」と廟號が見える点から、これが文宗の命で編まれた書の逸文であることを疑う向きもあるかもしれない。しかし、伊藤正義等（1997）535 頁が引くとおり「文宗」を「敬宗」（文宗の一代前の皇帝）に作る『私注』の寫本もあるし、文宗の死後、王起が自著を修訂した可能性もある。なお「廿一主」に續く、唐の滅亡をいう記述は、後人の加筆であろう。

る。中でも『廣五運圖』、『王氏五位圖』が日本に傳わる歴代の書目に見えないこと、前々節 II) に引く『新唐書』が王起の『文場秀句』を「總集類」に置く事實は、それを啓蒙書と考えることを阻む最大の要因である。

ただし目録に見える典籍が、当該時點で存在した著作の全てではない。更に、その情報が必ずしも内容の吟味を経るとは限らない。例えば、『新唐書』の撰者が『文場秀句』という書名だけで、秀句集（一種の總集）と判断した事態は充分にあり得る。また、語彙の解説書が有する作文教本としての性格が、同書を文學書の中に位置付けさせたとも考えられる。現に、『日本國見在書目録』はそれを詩文指南めいた典籍を含む「小學家」に分類する（注 8）。

『文場秀句』は一卷（第三節の I）、II）参照）、『廣五運圖』は三卷、『王氏五位圖』は三卷乃至十卷（本節冒頭の『玉海』にいう）と王起が粉本を「廣げ」た後も、小規模に止まった。總て、勅撰書にありがちな堂々たる大部な文獻ではない。弱年で没したと推測される太子の、しかも死に二年先立つ開成元年（836）にそれらは編まれた（第三節 III）注 20）。年少者が實際に用いる教科書としては、適正な分量であろう。その意味で太子が使うとはいへ、當時の一般的な士人、また富裕な庶人の子弟が用いる教本と、大差無かったのではないか。

『私注』に引く「王起云」が『廣五運圖』の斷片か否か、いま確證は見出し得ない。ただ、ひとまずその假定を考慮に入れて、次節では別の角度から唐代の啓蒙書について考えたい。

六、唐代の蒙書と通史

『私注』の引用と異なり、王起『五位圖』の内容を確かに示す資料が、實は一つ存在する。

甲申、屯田員外郎呂奉天上言臣伏見經史年曆、自漢魏已降、雖有編聯、周秦已前、多無甲子。太史公司馬遷雖言歲次、詳求朔閏、則與經傳都不符合、乃言周武王元年歲在乙酉。唐兵部尚書王起撰五位圖、言周桓王十年歲在甲午、四月八日佛生、常星不見。又言孔子生於周靈王庚戌之年、卒於周悼王四十一年壬戌之歲。皆非是也。馬遷乃古之良史、王起又近世名儒、後人因循、莫敢改易。……已上並據經傳正文、用古曆推校、無不符合、乃知史記及五位圖所編之年、殊爲闕略。（『宋太宗皇帝實錄』卷七十七）

北宋の至道二年（996）四月、皇帝・太宗（在位 976～997）に奏上された文章から引用した。「……」で示す省略箇所には、呂奉天自身が算出した上古の重要な事

跡が起こった時點の干支を列挙する。自らの改曆計劃が優秀だと認めさせるために、彼はこの文章を著した。それだけに、『史記』等の誤謬を殊更に数え立てたようだ（周の武王元年の干支など、同書の現行本には明記されない）。従って、彼の論調を鵜呑みにするのは危険でもあろう。しかし、そこに王起の『五位圖』やそれが記す上古の史實への言及がある點は見逃せまい。

第四節に掲げた『私注』のC)とD)は、聖天子の事跡を述べていた。もとより、何年に何が起こったなどとはいえない傳説上の時代である。だが、恐らくは西晉・皇甫謐の『帝王世紀』等に基づくのであろうが、それでも堯や舜の在位年數が彼らの事跡と共に記される。また、B)とD)とは確たる記録が残る時代を扱っており、君主の代數を明記する。紀年に注意を拂う姿勢は、呂奉天がいう王起が著した『五位圖』の記述法と共通點を持つだろう。

いったい、正史の多數など斷代史が量産される中で、王朝の交代を区切りとせぬ歴史書も中國では夙に編まれていた。この流れは、隋唐期にも續いた²²。その中に、太古から隋唐、即ち當時の現代までを扱う史書も存在した。佛教史書の中のそういった著作には、殊に目を引かれる。佛教史を總體的に論じるため、それらは通史の形を取ることになる。隋・費長房『歷代三寶紀』冒頭の三卷が「帝年」と題する周から隋までの年表となっているのは、その先驅けといえる。現存する文獻こそ稀だが、唐代においても類似の書、例えば玄暢（783～861）『三寶五運圖』（散逸、北宋・贊寧『大宋僧史略』等が少しく引用）などが著されている²³。

王起の『王氏五位圖』や『廣五運圖』は、そのような時代状況の中で著された、唐代までを記述範圍とする通史だった（前節に挙げた『玉海』が引く『崇文總目』参照）。呂奉天がいう、同書が孔子の他に釋迦の誕生年まで記した背景には、當時の佛教、具體的には佛教系の史書より受けた影響があったものか²⁴。その當否はともかく、上古から現代までを通觀する史書には、複雑な歴史の流れを斷代史以上に簡便に把握できる效用がある。

『廣五運圖』や『王氏五位圖』は、王起が既存の文獻を増訂した成ったものである。原據となった『五運圖』、『五位圖』については、杳として知れない。ただ、前掲の諸資料より考えて、両者も編年體の通史で、南朝後期以降に編まれてきた年曆（年表）の要素を持つものではなかったか。憶測を逞しくすれば、簡便性ゆえ

²² 尾崎康（1969） 瞿林東（1989）23-28、71-89 頁参照。

²³ 隋唐の佛僧・佛教者による通史については、大内文雄（2013）71-172 頁参照。

²⁴ 呂奉天によれば、『五位圖』は周の桓王十年（前 710）を佛陀降誕の年としていたが、この年は辛戌で甲午ではない。『歷代三寶紀』など佛教系の史書は多く次代の莊王十年（前 687）甲午に作る。ただ、某王十年甲午とする點は、『五位圖』もそれらと等しい。因みに、『大宋僧史略』卷一に引く『五運圖』では平王四十八年戊午（前 723）に繋げる。

に重寶されていたか、かかる歴史の手引きが、王起の手で『廣五運圖』、佛教教團内では『三寶五運圖』へと増補されたのではなかろうか。文宗への進上（836）から百六十年の時を隔てて、宋代にその『（王氏）五位圖』の名が上奏文という最も公的な文書に現れた事實は、同文で「近世の名儒」と呼ばれた王起の權威によるところが大きい。だが、元來の利便性がために同書が通行していたことも、また想像に難くない。「朝野の士人」が科擧受験や任官の便を狙って、『五運圖』とも関わりがある『文場秀句』を読んだという第二節で紹介した馮道の逸話と同じく、俗書の生命力が想像される。

このように簡便な通史は、敦煌文獻の中にも存在する。歴史に関する知識を含む啓蒙書は少なくないが、太古からのそれを専門に扱う典籍としては『帝王略論』、『天地開闢已來帝王記』が代表格といえる。前者は、日本にも舊鈔本（金澤文庫舊藏、東洋文庫現藏）が傳わる。

P.2636 帝王略論〔卷一〕

- 14 〔略〕太昊帝庖犧氏、姓風。蛇身人首、有聖德。始作瑟卅五絃、制嫁娶
15 之禮。受龍圖、有景龍之瑞、故以龍紀官、故曰龍師。仰則觀象於天、俯
則
16 觀法於地。始作八卦、以通神明之德。結繩爲治、爲網罟、以田以漁。取
犧牲、以
17 充庖廚、故號曰庖犧氏、或號伏犧。
18 炎帝神農氏、姓姜。人身牛首、始作五絃之瑟、擘木爲耜、揉木爲耒
19 耨、始教天下種穀、故號神農。嘉禾生、醴泉出、以日中爲市、交易而退、
20 各得其所。始重八卦、爲六十四焉。〔中略〕
32 略曰、帝堯陶唐氏、名放勛、黃帝之孫、姓祁。聰明文思、允恭克
33 讓。以尹喜爲師、許由爲友。堂高三尺、茅茨不剪、土階三寸、夏日
34 葛衣、冬日鹿裘。有草生於階、以月初一日生一莢、至卅日、日落一
35 莢、若月小則一莢而不落、名曰蓂莢。堯觀之、以知旬朔。又生脯於
36 廚、其形如籩、名曰籩脯。暑夏之日、廚内常涼。於時景星見、甘
37 露降、醴泉出、朱草生、鳳凰止庭。故仲尼云、唯天爲大、唯堯則之、
38 蕩蕩乎民無能名焉、巍巍乎其有成功者也。乃舉舜而讓天下
39 焉、崩年百一十八歲。
40 略曰、帝舜有虞氏、高陽之後、姓媯、瞽綽之子。父頑、母嚳、弟傲。
41 舜少而至孝、堯聞其聰明、用之。舜乃舉禹爲司空、以治水土。棄
42 爲后稷、以播百穀。契爲司徒、以教萬民。皋陶爲士師、以理獄訟。垂
43 爲共工、以典工巧。益爲朕虞、以育草木。伯夷爲秩宗、以典三禮。皞

44 爲樂正、以和神人。百僚咸得其才、堯乃禪以天下。太平乃作哥曰、元
45 首明哉、股肱良哉、庶事康哉。又哥曰、元首叢穡哉、股肱情哉、萬事
46 哉。于時日月光華、卿雲叢聚、彈五絃之琴、咏南風之詩曰、南風之薰
47 兮、可以解吾民之愠兮。南風之時兮、可以阜吾民之財兮。作簫韶之
48 樂、鳳凰來儀、擊石撫石、百獸率舞。故仲尼曰、韶盡美矣、又盡善也。
49 以位禪禹、年百歲崩。〔以下略〕

P.4016 天地開闢已來帝王記

84 問曰、伏羲何所制作、受命幾許。荅曰、伏
85 羲龍身、姓風、名王。能造衣裳、定
86 日月星辰、成立萬物、推其陰陽、以成
87 冬夏。爾時人民頑愚質朴、未能分別
88 禮儀、未有五穀衣裳、田宅屋宅、巢
89 居穴處、逢男爲夫、逢女爲婦。萬物
90 未備、仰瞻天下、以造天下八卦。伏羲
91 伏牛乘化馬、受命一萬八千歲、乃則
92 變爲天地、百蟲禽獸、龍蛇魚鱉、金
93 銀珠玉、政萬物欲〔生〕未祥龍言。號曰伏
94 羲也。〔中略〕

111 問曰神
112 農氏何處人、姓何字誰、有何軌則。荅曰、
113 神農姓姜、上黨人、治在冀州、水王天下。
114 爾時人人乳食鳴獸、人民轉多、食不可
115 足。神農爲人歷涉七十二山、口嘗百姓
116 草、望得甘美者、與百姓食之。或值毒
117 草者即死、唇口破壞、一日之中、百死百
118 生。後至上黨牛頭山中神石峪峒、遂得
119 嘉禾、一株九得、嘗之甚美、教人種
120 之、甚茂、遂濟禽狩之命。治經八十
121 年、遂即滅矣。〔中略〕

135 堯、陶虞、名
136 放皞、黃帝之子、治在平陽、作法律、
137 皋陶輔之、網造作刑獄、治經七十
138 年而禪位。舜、虞氏、高陽之後、

- 139 河東人、姓爲、字重華、治在蒲叛城。
140 [教]人恭順、四方歸湊、治五十年、遂即
141 禪于禹。〔以下略〕

庖羲（伏羲）・神農・堯・舜の事跡を語る箇所を、兩書から挙げてみた。唐初に虞世南ほどの學者が帝王學の教科書として編んだ『帝王略論²⁵』と出自の不明瞭な『天地開闢已來帝王記²⁶』とでは、敘述の傾向に相違がある。後者が前者より經書などに見えない記事を多く含み、周代までで記述を終える（前者は殘存部分だけでも漢代に及ぶ）ことはその例であろう。しかし、歴史の情報を得るための蒙書として機能し得る點で兩者に差異は無い。内容からも、初歩的な知識に止まる意味でも、第四節に引いたA）・C）・D）とこれらの間には類似が見て取れる。證據は不十分ながら、敦煌で讀まれていた兩書と同様に、『私注』に引く王起の説の出所となる文獻が、簡略な歴史の教本とされていた可能性は一考の餘地があるだろう。

七、おわりに

王起が科擧試験における辭賦で名高く、また彼が撰者だという詩格（作詩法指南）『大中新行詩格』が存在した點は前稿でも指摘した²⁷。現存する彼の文章に賦、それも定められた韻字を用いたもの六十五篇を含むことは、科擧で課される定型的文章と王起との縁の深さを象徴するかもしれない²⁸。この事實を前にすれば、宰相且つ當時一流の著述家だからといって蒙書としての『文場秀句』を著すはずが無いという先入観は再考すべきかと思われる。

最後に、『廣五運圖』、『王氏五位圖』と小論でその逸文と考える引用について二點指摘しておきたい。まず「圖」を含む書名だが、ここから北宋の司馬光が『資治通鑑』を編むに当たって作成した『歷年圖』が思い起こされる。それは今日、彼の『稽古錄』の中に部分的に残るが、全體として年表めいた簡略な通史（伏羲から宋の英宗まで）といえる²⁹。この後、諸葛深『歷代帝王紹運圖』（1076序）など、より圖表化した史書も著されるが、同類の著作を「圖」と稱する慣習が唐代よりあったとすれば、『五運圖』も同じ系譜に位置付けられる。

²⁵ 『帝王略論』の研究史などは金程宇（2009）3-11頁、會田大輔（2011）96頁の注（1）から注（4）参照。録文はこれらに見える東洋文庫所藏寫本の情報で缺落を補った。

²⁶ P.4016の末尾に乾祐三年（950）が見える。この他、P.2652・S.5505・S.5785にも『天地開闢已來帝王記』は書寫されており、本文中の録文ではこれらに據って文字を改めた箇所がある。同書に関する專論に郭鋒（2002）338-359頁、蘇穹（2010）などがある。

²⁷ 永田知之（2008）126-127頁。詩格についての筆者の見解は同（2010）に示した。

²⁸ 『全唐文』卷六百四十一から卷六百四十三に見える。出所は全て『文苑英華』である。

²⁹ 『歷年圖』については稻葉一郎（2006）481-510頁参照。

今一つ『私注』に王起の説が見える理由に關して附言しておく。『私注』は『和漢朗詠集』の注釋として、大江匡房（1041～1111）の『朗詠江注』、所謂『江注』に續くものである。先行の『江注』に比べて、それは古典の知識が淺い者を對象に編まれたという³⁰。そのような撰述の方針が、撰者の信阿をして、俗書の性質を多分に持つ『廣五運圖』（乃至それを引く文獻）に手を伸ばさせ、帝王や王朝の名にすら懇切な注を施させたとは考えられまいか。いずれにもせよ、日本傳存資料が失われた中國典籍の情報を含む好例、また中國中世の啓蒙書に關する資料として、これらの引用文については、專家による本格的な分析が俟たれる。

參考文獻一覽

（著者名等の後の括弧で括った數字はその論著の發表・出版年を意味する）

【日本語によるもの】

會田大輔（2011）：「日本における『帝王略論』の受容について——金澤文庫本を中心に」、神鷹徳治・靜永健編『舊鈔本の世界 漢籍受容のタイムカプセル』（勉誠出版）

伊藤正義等（1997）：伊藤正義・黒田彰・三木雅博編著『和漢朗詠集古注釋集成』1（大學堂書店）

稻葉一郎（2006）：『中國史學史の研究』（京都大學學術出版會）小論關連部分は「『歷年圖』と『通志』——『資治通鑑』の成立過程に關する一考察」として『史林』74-4（1991年）に初出。

大内文雄（2013）：『南北朝隋唐期佛教史研究』（法藏館）小論關連部分は「歷代三寶紀の一研究」、「歷代三寶紀帝年攷」、「中國佛教における通史の意識——歷代三寶記と帝王年代錄」として各々『佛教史學研究』25-2（1983年）、『大谷大學報』63-4（1984年）、『佛教史學研究』33-2（1990年）に初出。

尾崎康（1969）：「通史の成立まで」、『斯道文庫論集』7

財團法人武田科學振興財團杏雨書屋（2009）：財團法人武田科學振興財團杏雨書屋編『敦煌秘笈』影片冊1（財團法人武田科學振興財團）

東寺貴重資料刊行會（1983）：東寺貴重資料刊行會編集『古代說話集 注好選 原本影印綯釋文』（東京美術）

³⁰ 『私注』の特徴や他の注釋との關係は三木雅博（1995）211-324頁參照。なお、第三節E）に南齊ではなく北齊の皇統を擧げるのが『私注』の誤謬だということは、注15で述べたとおりである。ただし、「王起云」が王起の著した太子の教科書という推測が正しければ、北朝の繼承者を自任する唐王朝の編纂物として、南朝に關する記述が、そこに缺けていた、乃至少なくともなかったため、信阿の誤りが誘發された可能性は考慮すべきかもしれない。

永田知之(2008):『『文場秀句』小考——「蒙書」と類書と作詩文指南書の間』、『敦煌寫本研究年報』2

永田知之(2010):『書儀と詩格——變容する詩文のマニュアルとして』、『敦煌寫本研究年報』4

那波利貞(1974):『唐代社會文化史研究』(創文社) 小論関連部分は「唐鈔本雜抄攷——唐代庶民教育史研究の一資料」として『支那學』10 特別號(1942)に初出。

福田俊昭(1991):『王起の傳記』、『東洋研究』101

三木雅博(1995)『和漢朗詠集とその享受』(勉誠社) 小論に関わる部分の大半は「院政期における和漢朗詠集注釋——「朗詠江注」から「和漢朗詠集私注」へ」、『『和漢朗詠集私注』の方法』、『『和漢朗詠集私注』の變貌——平安末期から室町期にかけての『和漢朗詠集』寫本の動向と関連して』として各々『梅花女子大學文學紀要(日本文學篇)』23(1988年)、『文學史研究』21(1981年) 梅花女子大學紀要委員會編集『梅花女子大學開學二十周年記念論文集』(梅花女子大學、1985年)に初出。

柳澤良一(2010):柳澤良一編『和漢朗詠集私註・文筆問答鈔』(勉誠出版)

山崎誠(1993):『中世學問史の基底と展開』(和泉書院) 小論関連部分は「『類林』追考——中世史漢物語の源流」として『國文學研究資料館紀要』17(1991年)に初出。

六地藏寺(1985):六地藏寺編纂『倭漢朗詠集他一種』(汲古書院)

【中國語によるもの】

王三慶(1993):『敦煌類書』上册(麗文文化事業)

王三慶(2014):『敦煌吐魯番文獻與日本典藏』(新文豐出版)

郭鋒(2002):『唐史與敦煌文獻論稿』(中國社會科學出版社) 小論関連部分は「敦煌寫本《天地開闢以來帝王記》成書年代諸問題」として『敦煌學輯刊』1988-1・2に初出。

金程宇(2009):『稀見唐宋文獻叢考』(中華書局)

瞿林東(1989):『唐代史學論稿』(北京師範大學出版社) 小論関連部分は「中唐史學發展的幾種趨勢」,「唐代史家的通史撰述——兼論中國史學發展中的一個轉折」として各々『史學月刊』1989-1(1989年)、『北京師範大學學報(社會科學版)』1985-3(1985年)に初出。

周西波(2012):『《敦煌秘笈》“羽 072b”寫卷的性質與意義』,中央文史研究館・敦煌研究院・香港大學饒宗頤學術館編『慶賀饒宗頤先生九十五華誕敦煌學國際學術研討會論文集』(中華書局)

蘇穹（2010）：「敦煌寫本《天地開闢已來帝王記》考校研究」，上海社會科學院《傳統中國研究集刊》編輯委員會編『傳統中國研究集刊』7（上海人民出版社）

張海鷗（2007）：「從秀句到句圖」，『文學遺產』2007-5

陳尚君（1997）：『唐代文學叢考』（中國社會科學出版社）小論關連部分は「唐人編選詩歌總集敍錄」として施議對・蔣寅主編『中國詩學』2（南京大學出版社、1992年）に初出。

白化文（1999）：「敦煌遺書中の類書簡述」，『中國典籍與文化』1999-4

李銘敬（2003）：「日本及敦煌文獻中所見《文場秀句》一書の考察」，『文學遺產』2003-2

（作者は京都大學人文科學研究所准教授）